

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Development of temperamental regulation of infants at 6 and 24 months: Associations with maternal soothing and distress

和文タイトル:

6 か月から 24 か月の乳幼児の制御機能の発達: 母親のあやし方との関連

ユニットセンター(UC)等名: 愛知ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Health Science Report

年: 2024

DOI: 10.1002/hsr2.70036

筆頭著者名: 中川敦子

所属 UC 名: 愛知ユニットセンター

目的:

本研究では、気質の心理生物モデルに基づき、母親の心理的ストレスが、乳幼児のあやし方、とりわけ注意を別な刺激に向けて気を紛らわせるようなあやし方に与える影響と、さらに、乳児がこのようにあやされることの経験と気質的な制御機能の発達との関連を検討することを目的とした。

方法:

サブコホートから抽出したサンプル(N=1892)の生後 6 か月と 24 か月の対象児の縦断的調査データを用いて構造方程式モデリング(SEM)を行った。気質は、日本語短縮版の乳児行動調査票(改訂版)と幼児行動調査票を用いて測定した。母親の心理的ストレスは、出生前と出生 12 か月後に K6 質問票を用いて測定した。また、母親のあやし方の個人差の測定には、オーダーメイドの項目を用いた。世帯収入を共変量として調整し、欠測値は最尤法により処理した。

結果:

産後 12 か月時の母親の心理的ストレスの高さは、生後 24 か月の子どもを視覚的な気晴らし法を使用してあやす傾向と負の関連があった($\beta = -0.06$, $p = 0.006$)。一方、気質的制御機能全体との関連は認められなかった。SEMにおいて、気質的な制御機能(エフォートフル・コントロール)の下位尺度である注意転換を適用したところ、母親が視覚的な気晴らし法を使用する傾向があるほど、すなわち幼児がぐずった時、注意をそらしてもらうことを経験するほど、彼らの注意転換得点が高くなった($\beta = 0.07$, $p = 0.002$)。

考察(研究の限界を含める):

これまで、視覚的な気晴らしによってあやされる方法が、情動制御の早期発達との間に何らかの関係がある可能性が示唆されてきたが、実証研究は少ない。
本研究の限界として、縦断研究の制約上、質問票に含めることのできる項目数が限られていたこと、測定したのは質問票における想定場面で母親が選択したあやし方であり、対象児が実際にそのような方法であやされていたかは定かではないこと、母親の精神状態と乳幼児の反応性の双方について母親の報告を用いたこと、パス分析で得られたベータ値のいくつかは 0.10 未満であったことから、結果の解釈には注意を要することがあげられる。

結論:

本研究結果から、母親が、ぐずっている子どもに対して視覚的な気晴らしを行うことが、乳児期および幼児期の自己調節の発達と関連する可能性が示唆された。